2013～2014年度　国際ロータリーのテーマ
ロン D.バートン

ロータリーを
実践し

みんなに
豊かな人生を

RI第2510地区 留萌ロータリークラブ

会報

2013►2014
WEEKLY REPORT

留萌ロータリークラブ
会長目標　**集中と調和**

会長／中出敏彦　幹事／大嶋孝広

プログラム

●本日
「情報集会発表」

●次週予定
「我が生い立ち Part２」
渡部　英次会員

配偶者誕生日
２月13日　高田美保子
２月13日　福士　泰雄

No. 2593
第30回　２月12日

出席報告

前例会

会員総数	41名
出免会員	８名
出免出席	６名
基準会員出席	19名
出席率	71.42%

前々会　第27回　１月22日

欠席会員	９名
内メイクアップ	４名
修正出席率	91.42%

例会／毎週水曜　12:15～13:15　留萌産業会館2F

会長報告

１．2510地区第１グループガバナー補佐の茶谷恵一様より、１月25日に開催された「上半期活動報告・下半期活動予定」等の会議出席の報告が届きました。冬季悪天候のため訪問出来ず、すみませんとの事でした。

２．２月２日に定例理事会を開催し、２月３月のプログラム、新春夜間例会の決算、２月26日開催の創立夜間例会の予算案を承認しました。

幹事報告

- 深川ＲＣより会報№2651～2653号及び２月例会案内を受領。
- 芦別ＲＣより会報№2719～2722号を受領。
- 平成25年度留特連南部ブロック特別支援学級合同卒業を祝う会の案内が届いております。

委員会報告

親睦活動委員会　**高田委員長**

今月22日の創立夜間例会は神居岩にて開催致します。後ほど皆様にはＦＡＸにてお知らせをいたします。多数の参加をお願いします。

３分間情報

会員研修委員会　**阿部委員長**

本日は、ロータリークラブの国際的な動きを効率的に見る方法についてお話をさせていただきます。

現在、国際ロータリー日本事務局が世界中で

活動している　ロータリアンの情報を日本語に訳して様々な形で情報発信をしています。ツイッター、フェイスブック、ホームページ…。興味のない方はほとんど触れずに過ごしているかと思います。私は、会員研修委員会で情報発信の役割を担っている関係でよく利用させていただいております。なかでも最も早い情報を発信されてるツールとしてツイッターが重宝しています。ツイッターをもっと簡単に説明すると、140文字のコミュニケーション・ツール。好きな人や興味ある団体の近況をチェックしたり、自分の好きな事をつぶやいたりして世界中のユーザーとつながれるものです。自分に発信したい情報がなくても、情報の閲覧のみで使用したければそういう事も可能です。面倒な手続きがあると感じている方がいると思いますが、ユニークなＩＤ、ＰＷ、自分のメールアドレスを登録するだけですぐに使用出来ます。

国際ロータリー日本事務局のホームページをよく見ている方でも、情報を得るためには何度もクリックして自分で奥へ入って探さなければいけないので、なかなか大変な作業になります。ツイッターには新しい情報や為になる記事が更新されるたび更新情報が発信され、詳しく記載がなされているページへ促してくれます。最近では国際ロータリー日本事務局のホームページ上でも「ロータリー関連ニュースは、国際ロータリー公式ツイッター日本語版をご覧下さい」と記載されており、ツイッターを使用するように勧められています。

１月のツイート興味深かったものだけを挙げてみても、ナイジェリアでポリオ撲滅に取り組む方の紹介。ＶＴＴと、アフリカで病院船を運営するマーシーシップスとの協力の紹介。先月行われた国際協議会の資料を見ることの出来るページの紹介。アフガニスタンで女子の学校を設立するために文字どうり命を懸けで尽した、ロータリアンの紹介。それとインドでポリオ撲滅の取り組み、と色々なカテゴリーの情報がランダムに発信されております。

２月はロータリーのカレンダーで「世界理解月間」として指定されています。この２月に、世界中のロータリアンの活躍を知る目的で、ツイッターでアカウントを作成する、またはこれを活用してみるというのを試してみては如何でしょうか。興味のある方がいらっしゃいましたら、お手伝いいたします。

ニコニコBOX

- 第３班の情報集会が終わりました。手弁当にて頑張りました。　情報集会第３班
- 理事会を急用にて欠席しました。申し訳ございません。　山本会員
- 中出会長と高田親睦活動委員長に友禅にてお肉をご馳走になりました。　行徳、鈴木会員

前　回	570,600円
今　回	10,000円
累　計	580,600円

プログラム

「ことしの留萌」

留萌市長　**高橋　定敏** 様

先ほど日の丸に正対して、君が代を皆さんと斉唱している間、色々私なりに日本人として生まれて良かったと思いました。日本の歴史や文化、そして私達が持ち続けてきた食生活に及ぶまで、今、和食は世界的に見直され、高い評価を受けているという事は、日本人をもう一度正しく理解していただく、大事な機会になっているかなと思っています。

実は、私は中川一郎先生の秘書をしている時代に、インドのマザーテレサさんが日本に来日した際、ニューオータニホテルで講演を聴いていました。その時に「日本の国は世界で№.１で、経済的にも豊かであるが、日本人の心に触れれば触れるほど経済は豊かでも心の豊かさは感じ

られない」と言われた事が今でも私の心の中に残っております。

しかし、今ロータリアンの皆さん方の奉仕の精神に基づく活動をいつも見ている中で、やはり奉仕の精神が、志が高ければ高いほど皆さん方が、「幸せ、健康、長生き」ができると感じました。実は、長野県諏訪中央病院名誉医院長の鎌田實先生のお話を聞いた時に、やはり「幸せで、健康で、長生き」は、絆と生きがいが一番大切だと言っておられました。人間はそれぞれ幸せを求めて暮らしていますが、色々な出来事がございます。しかしその出来事を支えてくれるのが、地域であったり、地域の絆であったり、仲間であったりします。その中で、幸せホルモンの話がありました。セロトニンという幸せホルモンがあり、これは美味しい物を頂いたり、美しい景色を見た時に、このセロトニンというホルモンが出るそうです。もう一つはオキシトシンというホルモンで、これも幸せホルモンの一つで、これは他人の身になって物事を考えてあげたり、他人に喜んでもらったりした時にこのオキシトシンというホルモンが出来て、この幸せホルモンが健康づくりに大きく影響するとの話でした。誰もが他人の為、地域の為、という思いを持つと健康で幸せな街づくりが出来るというお話を聞きました。

私も留萌市の市長という職を戴いて８年の歳月が流れようとしています。私が就任した時、留萌市の財政状況は大変厳しい状況でした。間違いなく財政の破綻、当時500億円以上の借金がありましたので、留萌市の予算規模からいうと、大変な額だと思いました。ただ、私はいくら財政が厳しい中にあっても、現状をただ維持するだけではなく、変化にしっかり対応していかなければならないと考えておりました。地方自治体の財政が厳しいのは、どこの町も同じ状況であり、様々な要因がございます。ある自治体は、国の経済対策のなかで公共事業の投資をやって一時的に経済対策は出来たけれども、その時出来た借金によって中々財政の処置が出来なくなってしまった。社会資本として施設は残ったけれども、運営管理すら儘ならない。そういう事情が留萌市においてもスキー場であったり、ぶるもの施設でもありました。

私は留萌市にとって、子供たちにとって辛い思いはさせるけれども、現状を打破する為にもしっかり時代に対応して、生き残って持続可能な自治体経営をする為には、きびしい判断だけれどもしっかりとした決断をしなければと考えました。時代、その時の環境それらの流れをしっかりとつかんで対応する。国、道の政策や予算で使えるものは十分活用する。その中で生き残りを懸けて、けして留萌の街を衰退させる事なく、行政としての責任を果たしていきたいとの強い思いがありました。生き残りを懸ける場合に、一番強いものだけが生き残るのか、一番賢いものだけが生き残るのかと言うと、そうではなく、ダーウィンの進化論ではありませんが、生き残るのは時代の変化にしっかり対応した者とのことですから、ある意味では昨日、今日、明日というなかで、職員としっかりと話をしながら、常に新しい事にとりかからなければなりません。

事業をする場合に予算措置が必要になりますが、アイデアとして事業を組み立てていれば、必ず道や国の政策の中で、それに該当する仕事が出てくるはずだと、そういう強い思いがありましたので、特に若手職員の方々とこれからの５年10年、30年先の留萌を考えてアイデアを出してもらいました。若い職員にも留萌の将来に対しての行政としての責任を持ってもらうように、意識改革を促しました。職員一人ひとりの意識を理解するにはやはり、一人ひとりの職員と目を合わせて話をしなければと思い、私の部屋に７人ずつ来ていただいて、一人ひとりとのコミュニケーションを図りました。病院の看護師さん以外の人とは全ての人と懇談致しました。その中で職員が何を思っているのか、市民とそう向き合っているのか、一人ひとりの職員が市民のニーズをどう考えているのか、自分は将来どういう道に進みたいのか、そして自分が変えたいと思うことは無いか、等々、色々懇談を重ねました。私が就任当時は本当に市役所に任せていいのだろうかという一市民の不安感、もう

一つは観光施設や体育施設、図書館などをＮＰＯ法人などに運営を任せる民営化という流れもありました。民営化しなければサービスも充実しないのかと言う問いかけもありました。しかし、市民の問いかけの中で一番私が大事だと思ったのは、留萌の将来の医療や介護や経済を回すその歯車を、誘導策として役所は積極的に取り組む事が出来るのかと言う問いに対して、しっかり応えていかなければならないと考えておりました。ですから30代の若い職員と懇談した時、30年間は市の職員として務める訳ですから、30年後の留萌市を見据えて、その責任をしっかり果たしていく覚悟を持ってもらう事が大切と思い、その懇談をしてスタートを切りました。

職員には、行政とはこの街の中で最大のサービス業である事を市民に認めてもらい、市民に必要とされる組織にならなければならないと対話の中で話しております。ある意味では商人の感覚では出来ないといか、精神論だけでは出来ないと行政マンとして言われる事がありますが、生き残りを懸けると言う事においては、相当強い精神力が必要となり、個々の才能を必要とされることから、「士魂商才」武士の魂で商人の才能を発揮してもらいたいと職員には言っております。職員の皆さんはしっかりとした意志、魂を持って、そして、行政として効率的に市民サービスを進めていく。それが留萌市の総合計画に掲げている市民満足度を高める、と言う事につながっていきます。只々漫然と予算執行して漫然とサービス提供していくだけでなく、サービス産業としての意識をしっかりと持って、経営センス的な能力を持ちながら、職員と共に一緒にやっていきたいと、伝えてまいりました。

少しでも市民に喜んでもらえる、楽しんでいただく、その様な機会を行政として増やしていく、出来るだけ悲しみや苦しみを少なくし、留萌に住んで良かった、留萌に生まれて良かったと思われるようになる事を増やしていくことが行政の仕事と思っています。役人、役人と言われますが、役に立つ人だから役人であり、役に立つ所だから役所と呼ばれるようにならなければなりません。その意識を職員で共有する事が財政を再建して次のステップに入る事が出来るのではないかと思います。

財政再建は市民、職員、議会、皆の理解を頂かなければ出来ないことですから、私はまず、スリム化する事を考え、職員の適正化を考えました。人口の同じような街を参考に、リストラを行い、もう一つは賃金カットでした。普通は財政再建をする場合、国から指定されるのが１割カットが普通ですが、夕張市が財政再建をする時は、あまりにも負債が大きすぎ２割カットせざる終えませんでした。今まで財政再建団体になっても１割以上カットしたことはありませんでした。そこで留萌市に於いても、財政再建団体に転落していないのに、２割カットを受け入れ、職員が受け入れてくれました。全国でも財政再建団体になっていない市がこれだけの賃金カットをした例がないほどでした。

今私が申したいのは、スリム化をして、安心安全な対策をしっかり進めて、そして市の職員の中にも、将来に向けてのアイデアを出したり、政策立案できるような職員を育てて行きながら、時代に対応した組織を作っていこうと思って行動しています。今、病院、市役所の職員の考え方は大きく変わってきたと思います。これは職員一人ひとりの意識改革が出来たと思っています。これだけの賃金カットをしても色々な提案が生まれてきておりますし、例えば、藤山町に低温の乾燥機を１千万円で導入しましたが、これも職員が総務省の補助事業で全て補助金で出来る事業にチャレンジした結果で、道の振興局を通じて総務省に提出して評価された結果です。

昨年に入ってからこの乾燥機を使って、職員が６次産業化に向けて観光協会と共に、リンゴの気持ちというソフトドライの乾燥リンゴ作りに取り組みました。これも農林省の６次産業化の予算を使って、農業、漁業の留萌で取れる物を使って新しい商品を作り出す試みをしております。今年１月から乾し大根として新商品の発売に至りました。今年はまだ3000袋だけですが、留萌、札幌で販売し完売の状態です。今年は３倍増の１万袋を作る予定とのことです。本当に

小さなことですが、職員の提案により実現した事例の一つです。職員がその現場の中で出来る事を考え、未来を見据えて行動する事が職員の一人ひとりの中に生まれた事は大変重要な事だと思います。

「うまいよるもい市」や昨日行われた「やん衆横丁」などのイベントなども担当課の職員だけでなく、その他の職員も交代交代で全ての課の職員が参加して、市民の楽しみやニーズを個人個人が受け取って、肌で触れる事が大切で、役に立つ人として「役人」と呼ばれる職員が増えてきたと思っています。

留萌市として今年、これから進めていかなければならない問題として国の農業政策があります。ＴＰＰの問題もありますし、米の減反政策もあります。特に農業に特化した、新たな事業の取り組みが必要となります。また漁業についても東海大学と一緒になまこの研究や、さらにホヤやカキの栽培等についても種苗生産の研究が行われています。また函館未来大学では、なまこの生産状態を調査するために、アイパッドを使って若き漁業者がなまこの取った数を打ち込み、未来大学でなまこの管理をしているという、これも画期的なことであり、大学を持たない留萌で東海大学や、函館未来大学の職員と漁業者の方々が交流できると言う事は大変明るい話題となるのではないかと思います。

次に健康の駅の話になりますが、旭川医大とのコホート事業の研究では、眼底写真を撮って送る数は1500人を越えており、1700人の予定ですので、あと200人となっております。これも旭川医大との連携で大きな成果もでてきております。旭川医大とは大学院生のころから留萌市立病院に来ていただいて新たに学生の為の宿泊施設も建設致しましたので、今まで以上に旭川医大とのパイプが出来ました。しかし、まだまだ全道的に医師の数が足りません。留萌市においても３つの科の常勤医師確保が困難な状況です。医大との話し合いを通して医師の確保を全力で頑張りますが、留萌市立病院でもまだまだ医師確保が大変だと言う事をご理解頂きたいと思います。

３つ目に留萌港の利活用についてですが、留萌港開港以来初めて、ナッチャンワールドのフェリーを使った戦車５台、トラックを含め30台の陸揚げがありました。これは旭川第二師団を有事の時にすばやく対応させるためのテストケースとして行いました。これは国の政策での利活用ケースですが、７月には飛鳥Ⅱと日本丸の寄港が決まっております。また、留萌港の倉庫には輸入アクセス米（外米）数千トン入れる方向性も見えてきましたし、もう一つ付け加えるならばトド松材の韓国への輸出の方向性も見えてきております。これで新たな林業産業の発展も見えてきました。

子供達の教育に関しても、行政としてしっかり責任を果たしていかなければなりませんし、心育む図書に対しての事業、さらには学力体力共に向上させるための政策に対してもしっかり支援していきたいと思っております。いずれにしても職員と私どもがしっかり留萌の将来に向けてどの様に進めるかしっかりと方向性を見定めて、まだまだ国の交付税に頼らなければならない財政事情ではありますが、守りの戦略ではなくて、生き残りを懸けて、守りながらもしっかりと攻めの戦略を打ち出していきたいと思っております。ゴミ処理場のライフラインを整えおりますが、その他のライフラインの整備も考え、市民に安心していただけるような街を作っていければと思っております。私としては色々な夢を語って大きな夢を持ち続けることが大切だと思います。財政事情の問題から現状の予算の中で中々厳しい部分がありますが、この街に生まれ、この街に育ったひとりとして、先人が築いたこの街のその思いを、もう一度思いながら私自身の判断を間違える事無く、体力気力を整えて頑張っていこうと思います。

これからも皆様のご理解ご協力をいただきますようにお願いしてお話を終わらせて戴きます。ありがとうございました。

第29回　２月５日（水）　天候／晴

（先週のつづき／阿部会員「年男大いに語る」）

まずは、「君な、経営って難しいやろ。行き詰まっても、行き詰まったと考えたらあかんのや。それでおしまいや。勇気も知恵もわいてきいひんで。」関西の言葉が拙いのはご容赦ください。私が入社して数年はバブルの余韻がありましたが、その後考えられないほどモノが売れなくなってきたとき、よく引き合いに出されていた言葉です。そして時代に対応するにあたり、周知を結集するため入社間もない社員にまで知恵を求める形を作り上げ、実際に活用しておりました。

「こけたら、立ちなはれ。」シンプルながらとても好きな言葉です。人に起こしてもらうのではなく自分で起きるんやで、という叱咤として受け取っております。

「とにかく、考えてみることである。工夫してみることである。そして、やってみることである。失敗すればやり直せばいい。」という言葉。大きな会社で優秀な人が周りにいくらでもいる、頼れる人も多い。それでも自分で考えること、自分で動くことの大事さを説いた言葉ですが、判断基準のしっかりしていない新入社員もベテラン社員と同じように意見を求める風土はその時代にも確かにありました。

「何としても二階に上がりたい、どうしても二階に上がろう。この熱意がハシゴを思いつかせ、階段を作りあげる。上がっても上がらなくてもいいと考えている人の頭からは、ハシゴは生まれない。」困ったらすぐ誰かに頼るのではなく、まず一生懸命考える癖をつけさせられました。

「どうしてみんなあんなに、他人と同じことをやりたがるのだろう。自分は自分である。何億の人間がいても自分は自分である。そこに自分の自信があり、誇りがある。そしてこんな人こそが、社会の繁栄のために本当に必要なのである。」ありたい姿があれば、そうはならないはず、という戒めです。

「人間の知恵というものは、しぼればいくらでも出てくるものである。」とか「もうこれでおしまい。もうこれでお手上げなどというものはない。」とも言っております。

「私は、失敗するかもしれないけれどもやってみようというような事は決してしません。絶対に成功するのだということを、確信してやるのです。何が何でもやるのだ、という意気込みでやるのです。」

「自分が利を得るために、不必要に自分の膝を屈することは決してすまい。なぜなら、そうして得られた応援や協力は、また目に見えないしがらみを生み、道を暗くするからである。」

「人より一時間余計に働くことは尊い。努力である。勤勉である。だが、いままでよりも一時間少なく働いて、いままで以上の成果を挙げることもまた尊い。そこに人間の働き方の進歩があるのではないだろうか。」

本にすると数冊分にもなる松下幸之助創業者の言葉の中から、自分の好きな言葉だけを抜粋してみましたが、抜粋してみて共通しているのは「知恵を絞る」「ありたい姿を持って行動する」「諦めない」ということでした。この３つが、自分で聞いて、自分なりに消化したなかで大事にしている基本的な考え方なんだなということを、今回この話を考える中で確認できたことは貴重なことだと感じております。このような機会を作っていただいたことに感謝申し上げて、私の「年男大いに語る」を締めさせていただきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。